ミ学生に上高地行きを誘ったら、殆ど全員が参加に同意してくれた。
往復は別行動とし、一日遅れで現地合流することになった。上高地でのメイン活動は、焼岳登山であり、5，6名の班をつくって、班長のリーダーのもとで行動した。中には、山草に詳しい男子学生もおり、女子学生の憧れの標的にされていた。
テント村での夜のキャンプファイヤーも圧巻で、梓川の冷水に冷やしたビールの酔いと共に、若い男女のカップルが、静寂な川辺の方に散らばっていった。
翌年の上高地行きには、小学3年生の息子を同行して、学生達のお世話になった。
その他、京都の嵐山旅行や野沢湖畔での夏期合宿も印象深い。

－武村学長らとの共演－

小生が教育学部に転入(昭54)してから数年後、教育学部長に就任された武村泰男先生から請われて、数名の教職員相手に尺八の手ほどきをすることになった。学生からは準師範の山村君にも応援を頼み、三翠会館・翠陵会館などで週一回練習することになった。
当時の練習仲間には、武村先生のほか、教育学部の久松貫海先生・由井敏郎先生・中村勝二先生・中西智子先生、人文学部に転出された友永輝比古先生、生物資源学部の安達六郎先生などがみえた。
現在は武村先生・久松先生・安達先生のほか、生物資源学部の飛岡次郎先生の参加を得て、週1回の練習を行っている。
定演には、昭和58年の第16回演奏会からであり、武村先生・久松先生・安達先生・友永先生らに、時々、賛助出演を賜っている。
そのほか、地元のお琴の社中の演奏会や附属幼稚園での演奏会にもご一緒に共演したりもした。

-他大学との交流－

昭和47年頃、当時クラブの部長を務めていた林君は、お琴の社中で知り合った他大学箏曲部と連絡を取り、三重県学生邦楽連盟をつくる動きもあったが、社中配下の箏曲部活動などがネックとなり、尻窄みになってしまった。
岐阜大学とは、昭和52年頃から交流が進展し、5年間程相互の定演には必ず応援に行くなど盛り上がりを見せたが、岐阜大での尺八部員ゼロ現象を機に途絶えてしまった。
また昭和58年頃には、東海地区での学生邦楽連盟が発足し、名古屋市の教育会館で数年間は合同の演奏活動をしたが、これも音沙汰がなくなってしまった。
今では尺八部員のゼロ化現象がアチコチの大学で蔓延しているようである。

－ＯＢ会の発足と中断－

昭和49年12月7日、三重会館での第7回定演の際に清水秀紀君(昭47卒)の発案のもとOB会結成準備会が開かれ、邦楽部OB会は三重大竹糸会と名付けられました。活動趣旨は定演の援助・参加協力と会員相互の交流親睦を図ることとし、毎年定演日の開催と年会費徴収（2千円）及び会報発行・役員選出（会長：岡本克夫氏）などが決められた。
竹糸会だよりの創刊号は昭和51年5月に発行され、翌年の第2号の発行のあと、昭和52年7月20日付けの第3号の発行で途絶えてしまいました。

－定演へのメッセージ集(拙著)－

「春夏秋冬」「花雷月雪」、四季折々の自然美は人に感動を与え、感動は芸術を創り出す。邦楽は日本の自然美を音で表す芸術である。心のふるさとを偲ばせる琴の響き、幽境の世界に吸い込まれる尺八の音色、私は日本の美をもっと大切にしていきたい。
（第4回）

科学が発達するにつれ、心身のアンバランスを増長させる傾向にあるが、音楽はこのアンバランスを癒し、邦楽は心を安定させる妙薬のように思える。身体を躍動させる響き、心を落ち着かせる音色……。（第5回）

これから始まる未完のシンフォニー、「色彩の艶やかさと調和する琴の響き」「魂の霊感を揺さぶる尺八の音色」、寒々とした暗い会場に描かれる音の絵巻。慌しい師走の心に休息を与え、日本の伝統美を少しでも偲ばせてくれるよう祈ります。（第6回）

大学生活の中で最も大切なことは、自らの意志で「何か」と、真剣に取り組むことである。そこから得たものは、おそらく生涯の友となり、人生の糧にもなるであろう。日本民族の伝統音楽である「琴・尺八」に取り組んだ人は、自然を愛する豊かな心が昂揚され、神秘的な音色に心の安らぎを覚えるものであり、これこそ心のアンバランスを癒す最高の良薬であろう。（第7回）

現代を生き抜くためには、精神生活が安定していなければなりません。枯れ木や石ころのように物に動じない心、つまり心を空にすることが必要であります。古来、日本の伝統音楽は、心を空にして森羅万象を写し出そうとする修業の道です。行く雲・流れる水のように心を空にして、今日一日邦楽の道に接してみたいものです。（第8回）

一本の竹、一本の桐から創り出される自然の音は、自然を征服するものではなく、自然と親しみ愛する心を培う媒体のように想われます。（第9回）